

家庭科

藤本文乃

1 家庭科における知識創造とは

家庭科における知識創造を次のように定義する。

知識創造の定義

*1
本校の研究では、知識に身体知として技能を含むととらえる

日常生活にかかわる課題を解決する活動を通して 日常生活に必要な知識*1を自分にとって意味のあるものとして実感を伴って身につけながら 生活をよりよくしていこうとする営み

生活を見つめ直すことから課題へ

実感や体験を伴う習得

生活の中での試行や実践

自己有用感を高める

家庭科の学習が始まる5年生までに、子どもはそれぞれの生活を通して個々に家庭科にかかわる知識を倍々蓄積しているが、衣食住に関する行為には意味があることにあまり気づいておらず、その知識を持っていることの自覚に至っていない場合もある。また、自分の生活の仕方が当たり前であり、違う生活の営みに気づく機会は少ない。しかし、子どもは、料理や縫い物ができるようになりたいという素直な気持ちを持っている。個々の持つ知識とその素直な気持ちを、生活をよりよくしていこうとする意志と実践力へと高めていくことが家庭科のねらいである。

そこで、まず自分の思いや願いに基づいて自分の家庭生活を見つめ直す中から、家庭生活に関する課題をもつ。その課題を友だちなどとかかわりながら解決していくことを通して、基礎的な家庭生活に関する知識を、実感や体験を伴いながら習得しそれを生活に取り入れることの意味に気づいていく。これは、多様な生活の実態や価値観、もの、人と出会いにかかわることによってさらに深まる。友だちとのかかわりの中から、共通点や差異、多様な考え方や方法などを出し合い試行、体験していく中で、自分の価値観を更新し、自分の生活をよりよく快適にすることができる知識を身につけていくのである。

さらに、それらを自分の生活でどのように取り入れるか考え試行や実践を行う。自分の生活が、知識を活かし工夫をすることでよりよくなること、自分も生活主体者として、より多くの選択肢の中から生活にかかわることを選んだり行ったりできること、家族のために何かができることに気づいたり実感したりすることが、生活をよりよくしていこうとする意志と実践力を育てていく。このような生活の中で実践を積み重ね自己有用感を高めていくことが、自ら生活課題を見つけ解決していける自立した生活者としての基礎を培っていくと考える。

2 知識創造の力を育むために

(1) かかわりの「場」のデザイン

個々の生活実態からの課題の共通化

生活の仕方が一人一人違う基盤に立つ子どもが、自分の日常生活に疑問や課題を見出し、なぜかな、よりよくしたいなどの思いを持ち、学習への必要感を持つことが家庭科の学習のスタートである。そこで、題材を個々の家庭生活のみならず子どもにとって共通のものを意図的にとりあげ、同じ必要感のある課題設定を行った。全員で同じ願いを持っているため、よりよい解決をめざして個々のスキーマの表出やかかわりがより促され知識創造が起こると考えた。

(2) 「かかわり」の活性化

多様な課題解決の方法と解新の違いの交流

家庭科では課題解決において、実践的・体験的活動を取り入れ、単なる言語的な知識だけでなく、おいしい、涼しい、暖かい、心地よいなど、実感を伴う学びをすることができる。そのため課題解決の方法や結果から得たことが共通であったり個々で違ったりする。この違いを意識づけることで、課題解決のためには友だちとかかわる必要が生まれ、「かかわり」を活性化させる。それを分類、整理、統合することで多様な見方、考え方に気づかせ知識創造の充実が期待できると考える。

(3) プロセスの自覚

自己の変容の実感

子どもが、授業での学びと自身の生活が結びついていることを認知し、自己の変容を実感していけるようにする。そのために、以下の三点の手だてを重視していく。一点目は、ワークシートや板書などを工夫し学習の目的、結果、生活に取り入れたことの観点を示し自分の課題解決の道筋が自覚できるようにすること。二点目は、課題解決の途中で機を逃さず、友だちの生活の工夫や生活をよりよくするための考え方の変化や学び方の「よさ」を価値づけふりかえりを残していくこと。三点目は、学習の最後に家庭生活で実践し、その後実践の様子とその結果の交流を行うことである。

3 「活用する姿」をめざして

家庭科では、子どもが生活に必要な新たな知識を獲得し、これまでの自分の生活に関する行為の中に主体的に取り入れていく力を培いたい。その知識を獲得するとき、言語的にあるいは単なる伝達的に教えられるのではなく、自分なりの課題をもって試行し体験するなどの活動を通して実感しその意味づけをしなければ、主体的な姿にまで高めることはできない。

そこで、生活に関する行為を知る→その行為の意味、なぜそうするのかを知る→それに関わる方法を身につける。その意味や価値と自分の生活とをつなぎながら身につけていくことを活用する姿ととらえる。そして、身につけたものを自分の生活をよりよくする知識として意図的に選択し、生活に働きかけようとすることを活用する姿ととらえる。

(1) 活用する知識の分類

題材構成を行うに当たって、有意味化させたい知識の抽象度の違いを考える。題材そのものに関わる基礎的な知識は具体的であり、なぜそうするのかという生活の行為の意味や生活に関わる考え方や価値観となると抽象度が高い。題材そのものに関するだけでなく広く生活全般に将来にわたって活用が期待できるような知識としても意識できるように、題材で活用させるものとその抽象度を明確にして学習計画を立て、授業の展開や手だてを考えていく。

(2) 生活に関する行為の差異の交流

個々の知識の差は生活経験に拠るところが大きい。それは自分の生活への関心の向け方、家族とのかかわり方にも影響されている。生活を見つめそれを交流することで、自分や友だちの生活の仕方を知り、既習の知識、共通点や差異、不足、疑問などを分類し可視化していく。それは活用していく知識の抽出にもなり、学習を始めるに当たっての自分の立ち位置の自覚となり、知識化や習得していく知識の見通しが子どもにも持てると考える。そこに自分なりの願いが加わり、当事者意識を持って主体的に解決していきたくする課題設定につながる。

また、試行や体験などを通してその方法や考え方に差異が生じるような課題設定をする。それを友だちと交流することで、個々の違いやよさに気づき意味のとらえを広げたり深めたりしていく。その個々の気づきや交流から導き出されたものを、全体場で価値づけこれから活用していける知識として共通理解を図って意識づけしていく。

(3) 実践的な実感をともなう活動

課題解決の方法を子どもの発想を認めると共に、選択の幅が広がるように時には教師からその方法を提示する。また、反対に意図的に失敗経験を仕組んでいくなど、活用する力に応じてデザインする。その方法から学び取ったものを今後活用できる知識として価値づけ、掲示や自己の成長記録などに可視化し残していく。

課題解決の過程で技能の習得が行われなければならない。技能の習得のためには、易から難への段階的なくり返しの体験が必要である。一人一人がより多く体験できる機会がとれるように形態の工夫をしていく。そして、実際にやってみることからの実感とできた喜びが技能の意味やよさの気づきを促す。自己の願いや疑問に基づいて試行し、獲得したことを次に活かしていきながら課題解決に向かえるようにする。

(4) 長期的な取り組み

学年や学期などを考慮し2年間を見通して題材レベル、学年レベルで活用できる知識を明確にし、くり返し経験できるように題材構成を考える。また、活用できる知識を掲示しておくなど、意識化のヒントになるような教室環境を整える。

また、4月当初に3月の自分の望む姿をイメージさせ言語化しておく。一つの題材が終わるごとに、自己の成長や新しく得た知識などを言語化し蓄積していく。それが活用を自覚し次の学習への意欲を高めると考える。

4 実践例－6年－

題材名 見直そう！生活時間と毎日の食事 パート2 ～おいしいごはんのみそしるを作ろう～

(1) 本題材における知識創造

毎日の食事調べから おいしくて栄養たっぷりのごはんのみそしるを作りたいという願いを持って ごはんのみそしるの栄養や作り方を 実践的活動を通して理解したり自分の家庭生活に活かしたりすることで 自分にとって意味のあることとしてとらえていくこと

食生活・食習慣の有様は家庭によってさまざまである。家族構成、生活時間、社会、価値観など色々な事が各家庭の食生活をかたち作っている。その中にいて子どもは受動的に食生活を営んでいる。よりよい食生活を営むことは成長期の子どもにとって大切である。子どもは家庭科において食についての関心は高いが、それは学校で調理を体験し食べられるからであり、今の食生活が十年、二十年後の自分を作るもととなっていることへの気づきは少ない。また、ごはんやみそしるが食卓に上る回数が減り、みそしるをあまり食べない、スープの方が好きという子どもも増えつつある。

そこで、子どもが実感を伴いながら日本人の伝統的な食事であるごはんのみそしるの良さを知りその基本的な作り方を習得していく活動を重視する。栄養たっぷりのおいしいごはんのみそしるを作りたいという子どもの願いから、だし、みそ、実の取り合わせや作り方等を友だちと調べ、試したり味わったりしながら実感をともなって知識を身につけていく。その過程で友だちとの食生活や感じ方・考え方の違いに気づき、知識や価値観を広げていけるようにする。

なぜ伝統的に続けられてきたかを自分なりに納得することが、自分の食生活を見直すきっかけとなり、自分でごはんのみそしるを作ることができるようになった喜びや自信は、生活の中に身につけたことを活かしていこうとする実践的な態度へとつながっていくと考える。

(2) 知識創造の力を育むために

① かかわりの「場」のデザイン

ごはんのみそしるのよさや栄養や作り方などについて調べる時に、グループ内での分担や調べたことの情報交換を行う。さらにそれを全体で交流する場をつくり、より多くの知識を得て考え方の違いに気づくことができる。内容面だけでなく調べ方や発表の仕方の自己評価・他者評価も行い、自他の良さや多様性を感じ、それを全体に価値づけることで、これからの学習の仕方のスキーマとする。

作り方の技能習得のために、ペアでの試し作りやグループでの調理実習を行い、一人一人が練習できる機会を多くすると共に、見合い教え合うことでより着実な技能習得を図る。

② 「かかわり」の活性化

子どもの願いや好みは一人一人ちがうが、6年生最初の調理であり調理器具などの物理的な条件を考慮し、ごはんのみそしるの調理実習では、みそしるはグループで1種類のだしを決め実はペアまたはグループで決めることとする。その前段として同じだしと実を使って試し作りを行う。同じものを使って作りながら出来上がりに差があることから、互いにかかわりよりよい作り方を得ようとする姿が見られると考える。そして互いの願いを取り入れたみそしるをおいしく作ろうとする意欲が高まる。全体で交流した調べたことの資料も掲示しておき、参考となる知識が得られるようにして選択のはばを広げ多様な考え方の中から決定していけるようにしたい。

③ プロセスの自覚

実感したことや実際に体験し目にしながら習得したことは活用しようとする意欲につながる。単に伝達的に教えられるのではなく、なぜそうするのかを納得することにもなる。自分なりの願いを持って体験的、実践的に活動し学んでいくことのよさをふりかえりとして残していく。実習などでの行為や作って食べてしまったものは、記憶をたどるしかない。そこで、ビデオや写真などの映像に記録を残し可視化する。さらの学んだことを自分の生活で実践しそれを交流することを通して、家庭科の学びのプロセスや学んだことを活かすよさを実感させる。学びを通してできるようになっ

た具体的な生活技能や生活への考え方を言語化して1年間の成長記録の中に残しておき、学年当初に考えた学年末になっていたい自分にどれだけ近づけたかを明確にしておく。

(3) 「活用する姿」をめざして

自分の願いに合ったごはんのみそしるの調べ活動と計画、調理実習、そして家庭実践の場に「活用」する姿が現れる。実験する、試行する、話し合う、師範を見るなどを通して、ごはんのみそしるについての基本的な知識を、生活経験や既習、調べたことをもとに、自分の生活とつながる知識として習得していこうとする姿を活用する姿ととらえる。その時の一人一人のより多くの体験と友だちとのかかわりが、確かな実感をともなった理解につながり以降の活用を促すこととなる。

ごはんをなべで炊いている家庭はほとんどないため、みそしるの方が家庭での実践により直結し、自分で作った達成感が大きいと考える。また、みそしるを食べる機会が減っている実態からも、みそしるにやや重点を置いて題材構成を行う。家庭実践でできた喜びと役に立つという実感を持たせ、それを実践カードに残し、さらにその交流も行う。自他の新たな工夫や考え方、生活の違いなどへの気づきが次の活用へつながっていくと考える。

(4) 学習計画（総時数14時間＋課外）

主な授業デザイン	モード	知識創造の流れ
1 食事調べをする目的と方法を知り行う 2 気づいたことや疑問からごはんのみそしるの学習課題を作り解決の見通しを持つ ○栄養たっぷりのおいしいごはんのみそしるを作ろう。 ・だし みそ 実のこと 作り方を調べたい ・調べる 発表する 作る 家庭実践と学習を進めよう	表出 共有	・米は毎日食べている ・同じものばかり食べている ・肉を食べている日が多くて野菜が少な目だな ・栄養バランスがとれている いやとれていない ・主食 しる物 副菜の組み合わせが多い ・あまりみそしるを食べていないよ 必要なのかな
3 みそしるについて知りたいことを調べ調べたことを発表しよう ・本 パンフレット 資料集 パソコン 人に聞く等の方法で調べよう ・栄養 実の取り合わせ 作り方など 4 同じだしと実で試し作りをしてみよう 5 試し作りからおいしく作るポイントをつかもう	表出 共有 共有 表出 活用 結合	・みそは大豆が原料なのでたんぱく質がある ・みそにも色々な種類がある ・入れる実によって栄養や効果がちがう ・だしによって作り方や味がちがうらしい ・やはりみそによって味が違う ・材料の量 だしの取り方 実の切り方 手順 火加減など作り方のポイントがある ・次はさらに作り方のポイントに気をつけて作ろう
6 ごはんのおいしいたき方を調べよう 7 比較実験をしておいしさを比べよう ・吸水時間を変えてたいてみよう 8 ごはんのみそしるを作ろう	共有 結合 活用	・みそしるの時のようにポイントを見つけよう ・実際に食べて確かめることができたよ ・これまでの試し作りを活かしておいしいごはんのみそしるを作ろう
9 家庭実践をしよう ・家族のためにごはんのみそしるを作ろう ・実践報告会をしよう	活用 有意 味化	・家族のことを考えてごはんの固さやみそしるのだし 実を考えよう ・ちょっと工夫をすることでおいしい栄養たっぷりの食事になるのだな ・これから自分でもできることがあるな

(5) 授業の実際と考察

4, 5時（以下本時とする）を中心に子どもに活用する姿が見られたかどうかを通して、本題材で知識創造がなされその力が育まれたかについて考察する。

① 本時の「活用」について

ごはんのみそしるを作るために必要な知識は、栄養や原料、みそやだしの種類、実の取り合わせ、技能面では、計量、だしのとり方、米や材料の洗い方、切り方、ガスコンロの使い方、火加減、加

熱時間、みその入れ方、配膳の仕方などである。それらが体験を通して子どもに身につけていくことを念頭に置いて学習計画を立てた。

本時で取り入れた試し作りは、生活経験を持っている子どもにとっては、自分の知識のレベルの確認になる。有効性や不足、思いちがいなどを認識でき、自信と次への意欲にもつながる。生活経験の浅い子どもにとっては、自分の新たな知識への気づきや未熟さの自覚になり、自分の身につけたいことを知るきっかけとなる。

本時で活用されたものは、既習（大きく切ったものは火が通りにくい、火が通りにくいものは先に入れる、前時までに調べたみそしるの作り方）や生活経験からの知識である。そこに試し作りによる体験（失敗と成功経験）が加わり、実感をエネルギーにして更においしいみそしるを作るポイントへと有意味化するための活用が起こる。活用を活性化するために以下の二つの手だてを設定した。そこで、手だての検証を行い知識創造に寄与したか子どもの姿をもとに考察する。

ア 体験をもとに活用する知識の抽出を試みる

全体に対してみそしるがおいしく作れたか、何が良くておいしくできたのかを問うたところ、「おいしかった。」などのつぶやきは多くあったものの挙手は少なかった。「だしの味がおいしかった。」「じゃがいもの柔らかさが、お母さんが作るのと同じでちょうどよかった。」と数名が発言したに留まった。みそ汁を作った経験がある子どもは全体の3分の1程度で、自分の腕前に自信がなかった子どもにとっては、自分でみそ汁が作れたことにまず満足して「おいしかった。」という思いが先行していた。また、調理中は作ることに夢中である。自分たちの行為を再認識するには、思い出しその行為の意味を考える時間と相手が必要である。

そこで、ペアで話し合いよかったこと、悪かったことをワークシートに書く活動を取り入れた（写真1）。あるペアは、教科書を出して手順に沿って自分たちと比較しながら話し合っていた。また、他のペアとも話をして、気づきを広げている姿も見られた。その後、話し合ったことを発表する場ではほぼ全員が挙手していた。話し合い書くことで自分たちが行った行為を見つめ直し、活用する知識を洗い出せたといえる（資料1）。



写真1 ペアの話し合い

- C1：煮干しをまぜたのがよかったよね。
C2：かき混ぜて煮干しのいいだしをだせたね。
C1：それと煮干しを半分にしてしみこみやすくして入れたよ。
C2：じゃがいもの切り方もよかったよ。うまかったよな。
C2：こまめに火の調節をして竹串で刺して煮え方も確かめたよね。

資料1 ペアの話し合いの様子

イ 子どもの意見を整理し観点ごとにまとめる

ワークシートは自由記述とし観点の項目立てはしなかった。発表の時も自由に発言させた。みそしるの出来栄えに対する個々の感じ方の違いがあるので、その方が意見を出し易いと考えたからである。全体の話し合いでは大別すると①だしの味や香りの有無②みその量③汁の量④実の形、大きさ⑤実の火の通り具合の五つの観点が順に出された。実際は全ての観点が関係しているのだが、子どもはなかなか気づかないところである。それに多少気づけたのは、③～⑤についての話し合いによってである（資料2）。

味噌が多すぎて水を足したら、量が多くなりすぎたという意見を受けて。

- C1：逆に汁の量が少なくてじゃがいもがゴロゴロになっちゃった。
C2：具の形についてなんですけど、じゃがいもの形がバラバラになっちゃって、煮た時に硬かったり普通だったりした。
C3：じゃがいもの形は揃っていたけど、大きすぎて火が通らなかった。
C4：わかめが火を通しすぎて、ぬめぬめで気持ち悪かった。
C5：じゃがいもを柔らかくしようと火を通しすぎて、だし汁が蒸発しちゃった。
T：わかめがヌメヌメになったことやじゃがいもの煮え方のことは、何の問題？
C6：煮すぎたのが問題。
T：他のことのようにまとめると何て書けばいいかな？
C7：火加減かな。強火にしたから煮えすぎたといえる。

C 8 : 強火にしてもすぐに火を止めればいから火加減だけでなく時間も関係していると思う。
 C 9 : 火加減と時間かな。
 C 10 : 料理の鉄則です
 T : みそしるだけに言えることではないということだね。
 C 11 : わかめを手でちぎったんだけど、長くなり過ぎて蕎麦みたいにすする羽目になった。
 T : 今の話はどこに書いたらいい？
 C 12 : 具の形 C 13 : 切り方？
 T : 形、すなわち切り方？
 C 14 : 具の形で切り方になるんだったら、火の通り方が違うのは火加減とか時間とかにはいるんじゃないですか。
 C : そっか……。う～ん。どっちも……。
 C : 切り方がもともと最初の作業だから切り方だと思う。
 T : 切り方がどう悪かった？
 C 15 : バランス。
 T : バランスとは？
 C 16 : 大きさが均一っぽくないからバラバラになる。
 C 17 : その方が見た目もいいし、火の通り方もOKになる。
 C 18 : 切り方が悪い場合は戻すわけにはいかないから、火加減で調整しなければならない。
 T : それぞれに無関係ではないってことだね。

資料2 全体の話し合いの様子

この話し合いを受けて、試し作りの時に撮影しておいた映像によって、実際にどのような切り方をしてきたかをふり返った。映像を見ながら子どもから「うわ〜。」「大きすぎる。」「細かい。」などの声があがった。「だれのだろう？」という声もあった。子どもは映像を見ながら、自分がどのように切ったかを思い出し、他の切り方と比較してよかったかどうかを考えていたととらえる。食べてしまって目の前にはないものを映像により視覚的に再認識でき、切り方を考える必要性の理解に有効であった。そして、次のみそしる作りでも材料は火の通り具合を考えて切ることの大切さを言語で価値づけることができた。映像と言語によって活用する知識として可視化することができた。

同様に、だしについても映像によってとり方による色の違いを全員が知ることができた(写真2)。そこから、煮干しを細かく割いて入れる、前もって水につけておく、味噌はだし汁をカップにとって溶かして入れるなど具体的な工夫を引き出すことができた。

これらの話し合いの最後に、「火加減にしても味噌の入れ方にしてもやっぱり調節しかないね。」という子どもの発言があった。子どもは試し作りをふり返ることで、具体からおいしく作るポイントを自分なりの言葉でまとめていたのである。子どもにその意識がありながら、題材(本時)の最後に活用の抽象度の高い知識としてまとめることができなかった。教師がそこまで明確に意図を持って題材構成を行っていなかったからである。



写真2 映像による再認識

② 本時の改善のポイント

本時の授業では以下の2点を今後の調理全般、ひいては生活全般に使っていくことができる知識として明確にまとめておくべきであった。それが次の実習、家庭実践、次の題材に生き、生活をよりよくする力につながるからである。

- ・生活技能にはおいしく作る(うまく作る)ための基本的な手順がある。
- ・その手順一つ一つには気をつけることや工夫がある

そのために次の四点が修正点として考えられる。

ア 板書の工夫：マトリックス型板書

上に手順、○×の理由、各班の工夫を表形式に表す。模造紙など保存できくり返し使えるものに残す。

イ 言語化

学習のまとめとして「手順と工夫」の言語化を行い学習のまとめとして板書に位置づけ可視化する。

ウ 個に応じた問題点と全体での話し合いのつなぎ方を工夫する

観点をしばったワークシートを使い、自分の問題点と友だちの問題点の違いや共通点を明確にする。また、自分のどこをよくすればもっとおいしくなるのか、うまくいったのはなぜか、全体の議論と自分に取り入れたいもののずれを埋める。そのため、同じ失敗をした友だちと話す、成功した友だちと話すなど話し合いの形態を工夫する。そこで話し合われたことを、全体で共有する。

エ 子どもの成功の意識、感情を考慮する

自分で作った満足感、友だちと協力して作った喜びは非常に大きい。おいしくできたのに、更になにを工夫するのか子どもには必要感がない。それを尊重し認めつつも自己満足に終わらせないようにしなければ、知識創造に至らない。そのため、友だちの作ったものや師範、よりレベルの高いものなどの比較が考えられる。

③ 題材を通して知識創造とその力が育まれたかについて

4, 5時の授業のふりかえりに、半数以上の子どもが書いていたことは、火加減と時間、実の切り方、だし汁とみその量である。2回目のみそしる作りの実習計画には、気をつけることとして同様の3点に関することが半数以上書かれていた(資料3)。ごはん炊きで気をつけることにも火加減と時間、水の量の言葉が半数以上書かれていた。子どもはみそしるの授業で有意義化した知識を、ごはん炊きでも使える知識として活かそうとしていた。2回目の調理実習のふりかえりについても、この3点のことや本時で話し合われたことに沿ってほぼ全員が書いていた。

本時と2回目のみそしる作りを通して、それに関わる知識の意味や有用性が実感を持って分かったと考える。本題材の知識創造であるおいしくて栄養たっぷりのごはんのみそしるを作りたいという願いを持ち、実践的活動を通してその作り方を調べ活用する知識とすることができた。

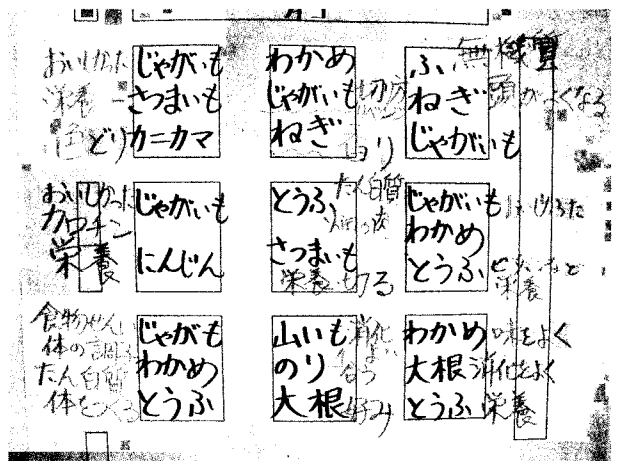
栄養については、調べ活動とその発表による交流が理解に効果的だった。自分が調べたいことが調べられたこと、新しい知識が友だちから得られたからである。栄養について分かった、役立ったというふりかえりが半数を越え、みそしる作りに役立ったとも半数が書いていた。そこで調べたり発表で聞いたりした実が、2回目の自由に選んで作ったみそしるの実として全員に使われていた。その実を選んだ理由は栄養を意識しているものが多い。また、じゃがいもを選んだ理由として、試し作りでうまくいかなかったことに再挑戦したいということがあった(資料4)。みそしる作りのポイントが自分なりに大切である、できるようになりたいととらえられたからだと考えられる。

家庭実践は、全員がみそしる作りに取り組んだ。みそしるに加えてごはんやおかずを作った子が3割程いた。みそしるの実には、とうふ、わかめ、じゃがいも、ねぎが多くわれていた。これらの実は、学校で作ったみそしるに使われていたものである。だしも、普段顆粒だしなどを使っている、煮干しや鰹節、昆布などを使っており、学校での調理経験が家庭実践にいきていることがうかがえる。他の実では、その食材に応じた下ごしらえを家族に学んだ子もおり、それを実践発表の場でみんなに広めることができた。

作るとき気をつけたこととして、みそしるは、実の切り方、火加減、実を入れる順番、味噌を入れた後すぐ火を止めることなどを挙げていた。ごはんは、水加減、吸水時間、蒸らしなどであった。工夫として栄養バランスや家族の好みを考えて実

- ・ だしをふつとうさせすぎない
- ・ 具材の量、大きさを考える→一口サイズ
- ・ 大きさをそろえる
- ・ 具を入れるタイミング→固いものから
- ・ 具材をしんまで煮る
- ・ みその量を考える、味見をする、濃すぎないように
- ・ みそを入れたらふつとうさせない

資料3 2回目の実習計画に書かれた気をつけること



資料4 2回目の調理実習の実と選んだわけ

の取り合わせを考えたこと、だしの味が十分出るようにしたことなどがあつた。家庭実践でも子どもは学んだ栄養や手順を意識して作っていたといえる。

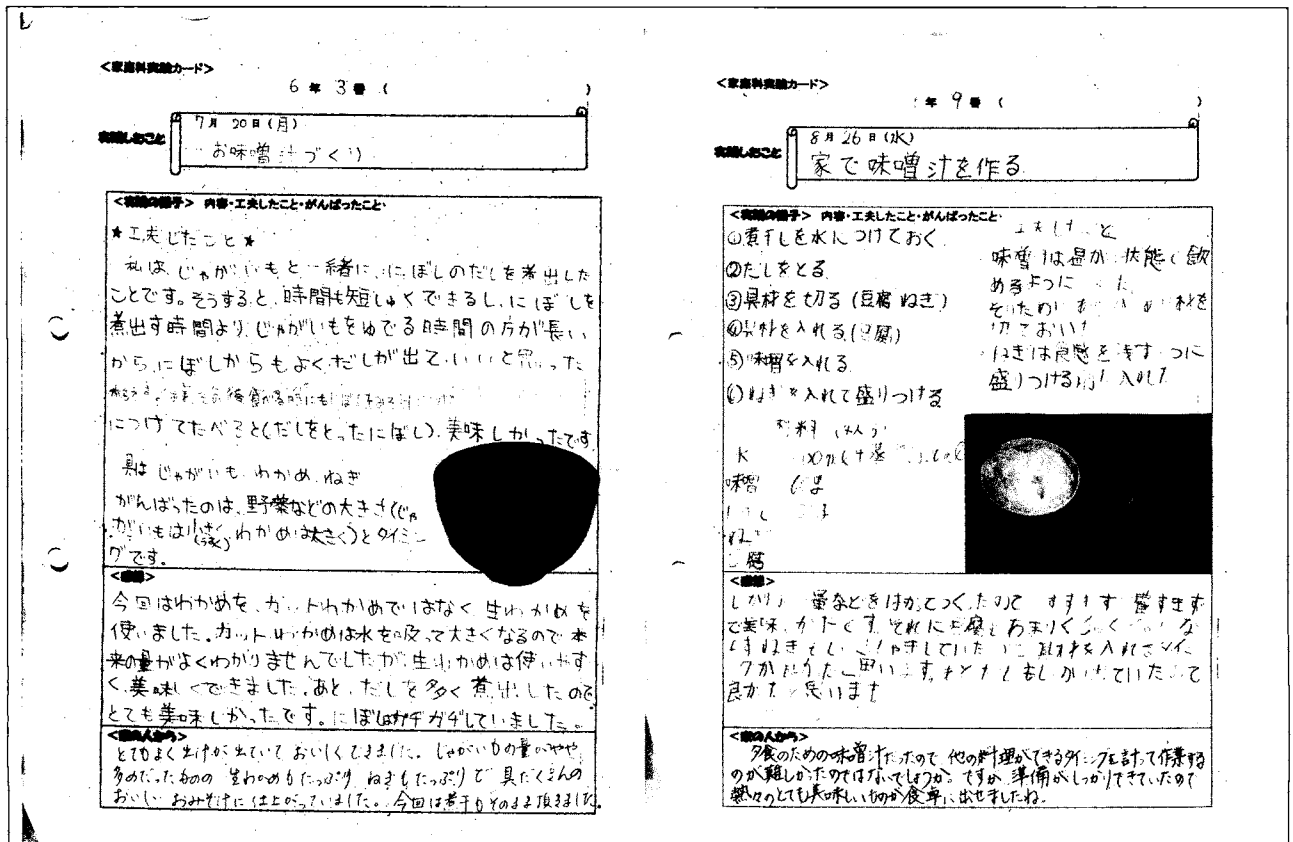
学校よりさらに上手に作れた実感を持つことができ、これからも作りたい、ほかの料理にも挑戦したいなどの意欲をほとんどの子が持っていた。それを後押ししたのは、家族によるところが大きい。全員が家族から、おいしかった、だんだん手際良くなってきた、一人で頑張っていた、また作ってほしいなど喜びの声をもらうことができた。普段みそしるを残す妹が全部食べてくれたと喜んでいの子もいた。中には、普段顆粒だしなどを使っているが、煮干しなどのほうがやはりおいしいので、これからは手を抜かず煮干しなどで作るようにすると書いている親もおり、家族にとっても、子どもの成長に気づくとともに、食への関心をもつきっかけになったようだ。自分で作ったみそしる活かして自分や家族の好み、健康などを考えて具材を選び、おいしいみそしるやごはんを作ろうという意欲や姿が、家庭実践カードから見て取れた(資料5)。

(6) 今後の課題

本実践では、題材そのものにかかわる短いサイクルでの活用する姿は見られた。調べ活動、交流、ペアでの試し作り、具材の自由選択の調理実習、家庭実践などの活動を取り入れて学習を進めていったことは、知識創造の充実に寄与したととらえる。学んだことや生活経験などを知識創造に使うとする意識や力も育まれたと考える。

しかし、より抽象度の高い次の題材、自分の生活に活かしていく力にまでは高めることができなかった。生活にかかわる知識は、今ここで、この題材に必要なものだけではない。この後の題材、そして将来に向けて長く応用して使っていける必要がある。そのことに子どもが気づき実感し自分自身で納得するようにすることが、生活をよりよくしていく実践的な態度へとつながるのである。本実践では活用される知識は何なのかのとらえが曖昧であった。既習事項や生活経験、試行による失敗経験をもとに子どもが掴んでくれるだろうと考えていた。活用させたい知識の段階や子どもの生活へのつなぎ方を意識しておらず、この時間ではこれを活用させると明確に持っていなかった。そのため、雑多な意見の羅列に終始し、それを生活の行為に対する見方や考え方に深めていくことができなかった。

将来に向けて長く応用して使うことができ、生活の行為に対する見方や考え方を深めていく知識を明確にし、年間を通してくり返し意識させ使っていけるようにしていくために、それを意図した題材構成や配置をさらに検討し実践していきたい。



資料5 家庭実践カード